

け軸へ……何者が一夜の内に斯るお姿をかいたのであらうとそれにして昨夜からけさ迄は、一睡もいたさずにおつたのだがたれもはいつてきた者はないはず、ハテナあやしき事があればあるものだ……』と、思いながらに件のかけ軸を手にとつてみると、元の白紙でお姿はみへない傳「や、こりや妙だ、今の今迄ありく」とあつた観世音のお姿が……手にとるときへるとはどうした譯だらう……』と、おやしみながらに又もや佛櫃へかけ、回向を終つてそのまゝ一日を暮し、翌朝みるとやはり観世音のお姿があらはれている、手にとるときへるとや、丁度三十一日の間といふもの、その掛軸の中へお姿が、あらはれたり隠れたり、さへたり現はれたり、どうも不思議なことがあると思つたが、察極まる春木主税は、最初の中こそあやしきと思つておりました、はては氣にもとめず、おかしなことがあるものだと思つて、位いの事でありました、これは果していかな

第十七席

る譯であるかといふことについては、玉秀齋が申しおくれはしたから、例によつて次第において詳しくべんすることにしたしませう……。

さて小石姫存生の砌り、良人傳内の留守をいたしてあります時、母清道尼の忌日、則ち月の十六日の事でございました、心ばかりの回向をいたさんと心掛けてをります折柄、丁度門前を通り掛かつた一人の旅僧がありました、小石姫はこれをみるよりに走りいで、法衣の袖をひきとめて、姫失禮ながら、貴僧様は行脚を遊ばす御僧とお見受け申します、およびとめ申してすみません、幸い志ざす佛事がございますれば、どうぞお立ちよりを願ひ、御回向をお頼み申します』と、鄭重に頼みこみます

夜泣石の由来

と、旅僧は快よく承知をいたし、早速宅へはいつて、佛壇に向つて回向を終り、懸て座を退つて静かに小石姫に向い、僧時に
 お女中、佛壇にある二面の位牌の内、一ツは右少辨俊基朝臣と
 法號があり、又一ツは朝臣と御内縁のものでござるか……
 ハイ、いかにも俊基に由縁のあるものでござります。僧フム、
 左様でござるか、俊基朝臣ときいて思い當る事があります。愚
 僧今よりズツと以前、鎌倉に赴く道中、槇の原において朝臣に
 由縁の人の家に泊り、夜もすがら回向をいたして、よくその法
 號を存じてはおりますが、今日又同じ山中にて、その時の法號
 へ回向をいたすと……不思議の到り、それにしてもお女中、
 そのおりおわせし御婦人は見へぬ様じやが、如何いたされまし
 たか……」と、尋ねられて小石姫はハタと膝をうち、姫夫では
 兼々母様よりきいてをりました、貴僧は南都の東福寺、兆殿司
 和尚様ではございませんか。兆、いかにも、愚僧はその兆殿司で

夜泣石の由来

ござる、してお身は…… 姫、ハイ、妾はあの時貴僧にお目に掛
 りました小夜姫の娘小石姫でござります…… 兆、エ、ツ、さ
 てはお身が小夜姫君の御息女でござつたか、これは、思ひ
 がけなき今宵の對面、然らば佛壇のあの一ツの位牌は…… 姫
 ハイ、あれが母上にござります。僧フム、夫では早や亡き人
 となり給いしか、世事無情寂滅為樂……」と、念佛をした兆殿
 司は、尙も詳しく様子を探ねますと、小石姫は涙ながらに、一
 伍一什を事も細やかに物語りますと、兆殿司は只管嘆息いたし
 兆ア、ア、愚僧若年の砌りより、錫を關東にとばす事十七年
 今日漸やく満願に及び、都へたち歸らんと、通り掛つたこの山
 中、先には小夜姫君の孝心に感じ、今又再びこゝによびこまれ
 て、息女の孝道をみるとは、誠に世にも珍らしき次第である、
 諸國の靈場を殘らず遍歴いたしたが、一人の善女に出合はず、
 然るに今夜お身にあふといふは、愚僧も一生の面目と申すもの

夜泣石の由來

四九一

斯様な喜悅はしき事はござらん……」と、兆殿司和尚は、十數年前以前に逆り、菊河の邊りにて宗行卿と俊基朝臣の幽魂をみた事を語り、兆この事は、愚僧も思いこんだる事がありましたゆへ、深く心に秘して、お母君にもつげざりしがッラ、その時の事を考へてみると、宗行卿の冤魂は女人に生をかへて、世の中をかき亂さんと申されしが、果してその言葉に違はず、先帝後醍醐天皇は、准后の讒言を信じ、大塔宮を書し給いてより、天下は再び麻の如く亂れ、左中將義貞は勾當内侍の色に耽り、軍議に怠つて、遂に越前足羽に陣没なし、或は高の師直が鎌谷の妻を挑み、又は良政卿は萬字の前を愛し給ふなど、一々申せば數限りもなく、これ必竟宗行卿の冤魂のなせる業、よつて愚僧都にたち歸りなば、早速事の由を奏問なし、速かに千僧を供養して、怨靈退散の追福をいたし、宗行卿の冤魂を慰め奉らん」と、語るをきいた小石姫は、兆殿司の言葉に感涙を催し、

夜泣石の由來

五九一

「誠に御奇持でございまする、つましましては和尚様、御覽の通り佛櫃には、まだハナ／＼しき本尊もなく、承はれば貴僧様には、畫をよくおかき遊ばすむやら、斯様な事を申しまするは恐れいりますが、どうぞ一幅の佛畫をお書き下さる譯には参りませうか……」兆「イヤ、承知いたしました、然らば幸い茲に一幅持つてをりますから、これを進せるでござらう」と、頭陀袋よりとり出したは、觀世音が畫像の一幅、兆「これは、愚僧が先年發心して、一千の觀世音を寫し奉つた中にも、とりわけ心に叶つた品にて、余りよくできているゆへ、東福寺へ殘しおかんと思つて、大切に所持してをりましたが、今お身の孝心に感じこれをお譲り申すでござらう……」と、小石姫に手渡しする、小石姫は大いに喜び、早速佛櫃にかけて禮拜いたし、その夜は鄭重に和尚を饗應し、兆殿司和尚も夜と共に語り明し、翌朝別れをつけてたち去りました、然るにその後小石姫が、かの沓掛

夜泣石の由来

村に於いて、隈高左衛門のため、非業の最後をとげました。件は、畫像は矢張り佛壇に残つてゐるのでございませう、それがどうした事か、傳内が手にとるとその畫像が失せるといふ、三七二十一日の間の不思議さ、傳内はツググ考へまするに、傳内、我れ今、諸國の勸化を乞ひ、多くの金を得たる上に、清道尼から残された金もあれば、これにて尼公の遺志を遂げ、鐘建立をいたす事はできるなれども、小石姫横死をいたせし時、大慈尊像の親世音をとられ、刺へ仇の名さへ判らず、只證據となるべきものは、この尺八ばかりである、これにも何の印しもなく、ア、どういたしたらよからうぞ、鐘を早く建立せんか、仇を先に探さんか……イヤ、仇は皆目的もなく、鐘は澤山の砂金もあれば直様成就のできる譯だ、これは寧ろ早い方を先にして、遅い方を後にするが當然だ、幸い今日は三月十七日、妻小石姫の忌日にも當るから、今日を鐘の當日と定めんぞうじや、

夜泣石の由来

とそこで春木主税の傳内は、名高い鑄物師に相談をして、鐘の事にどう掛りました、然るに茲に春木傳内の身の上について、一つの珍事出来と申します、その頃今菊河村の村長を勤めてをります愛宕宗仲といふ人物がございませう、この宗仲に二人の娘があつて、その名を初音とよび、ナカノ美人でございませう、父母の寵愛は一方ならず、今年二八の春を迎へて、縁組はマス、よくなるばかり、所が春木傳内が先きに縁組をしてゐる内は、この愛宕宗仲の家が一番の出入りで、一方ならず厄介になつてをりました大恩のある家、スルト娘の初音はいつしか傳内の男振りに惚れこみ、くる度にヤイノ、と口説きたてるばかりか、幾度となく戀の玉章を送りましたが、忠義無類の傳内は少しも浮いた心もなく、柳に風と受流し、又は封のまゝ、玉章は返してしまい、素氣なくいたしてをる、初音は只管それを恨み、ウツヲ、と落してをる内、到頭病の種とな

上つた鐘が鐘樓に上つたのは丁度三日目、即ち三月の二十日
 ございませう、山これ天下名題の靈場、鐘は又貞和再製の妙韻
 九層の石段を登りつめた上に、二重の鐘樓は高くそびへ、一度
 この鐘をつく時は、響は陰々として遠近に聞へ、流石十惡の罪
 障も、忽ち消滅して、速かに成佛するといふ有様でございま
 る、サテ鐘はこれででき上りましたが、傳内に少し心に思ふ處
 がありますからして、鐘供養をとげない内は、鐘をつかないこ
 とにいたしておる、處かこの鐘は普通の鐘とは違つて、つき座
 が一面の鏡をかけたやうに、ピカ／＼と光つて、誠に美事なも
 のであつて、萬物これに向ふ時は何者でも映らないといふもの
 はない、そのつやといひ鏡方といひ、古今まれなる立派なでき
 て、イヨ／＼二世の大願も、傳内に到つて始て成就したのであ
 るから、傳内は大いに安心いたし三日目、の晩にわが家へ歸つ
 てみると、あやしや佛壇の白紙の掛軸が、ユラ／＼と動いてい

る傳「オヤツ、鼠でもはいているのであるまいか」と、手早く
 検みてみたが、鼠のはいつた容子もない、傳内は不思議におも
 つて、手にとつて眺めますると、觀世音の尊像はアリ／＼とあ
 らはれて、少しもさへる模様がない、殊に昨日迄も赤兒をだ
 てあつた姿が、赤兒はぬけてして觀世音だけの姿と相なつてお
 ります傳「ヤ、いつも不思議のことばかりみるものだ、鐘建
 立の前迄は、このかけ軸を手にとると、白紙にみへたのみか、
 よしやそのお姿が現れても、赤兒をだいておられたに、鐘がで
 き上つた今日からは、手にとつてもお姿もさへず、赤兒のぬけ
 だしたといふは……ハ、アさては靈佛の何か御印驗に相違ある
 まい、どういふわけかはしらないが、これには深き仔細ぞあら
 ん、返つて人に話さぬ方がよからう」と、ふかくも心に秘して
 おりました、然るにその夜もダン／＼とふけ渡りまして、傳内は
 はヤオラ敷床にいらんとするその折柄、バタ／＼と裏と表

に人の足音、傳内はふと耳を傾け、傳オヤツ、もふ彼これ眞夜中すぎだが、多人数の足音がするとはわやしいことだ、或は山賊の類ではあるまいか』と、手早く一刀ひきよせ、フツと燈火をふきけして、いきを凝して伺つてゐるともしるやしらすや、表口に十四五人、裏手へは七八人の怪しの曲者たしよせ來り、一同はメリ／＼と戸口をけやぶり、バラ／＼と亂入いたし、主税の身の上といふアこの場の始末はどうなりませうや、春木もはや紙敷の制限と相なりまし、たつた、本編は一先この邊で、お預りと致し不日後編を『小夜の中の山夜大仇討』と演題を表はし、イヨ／＼い、愈々面白き大眼目、珍説奇談の上、物語りには、何卒後編のいづるをまつて、本編とおひき較べの上、鷹揚の御喝采を願つておきます、さぞ御退屈様……。

小夜の中の山夜泣石の由来終

明治四十四年九月廿五日印刷
 明治四十四年十月一日發行



口演者 玉田玉秀齊

大阪市東區北久太郎町四丁目五十一番地

發行者 岡本三郎

大阪市西區北堀江下通一丁目六番地

印刷者 南谷新七

發行所

大阪市東區北久太郎町
 四丁目心齋橋筋東入

岡本偉業館

電話號二一八七番

振替大阪二九九一番



大岡本偉業館發行



097837-000-5

特11-757

夜泣石之由来(小夜の中山)

玉田 玉秀齋/講演

M44

DBS-1777

